



二葉幼稚園

園のたより



2021年

1月の聖句

かみは あいです

ヨハネの手紙 | 4章16節

1月のさんびか

かなしいことがあっても こどもさんびか改訂版131

じっくりと



新しい年を迎えました。今年はいつになく、静かな新年でしたね。

阪神・淡路大震災から26年。年末に片付けをしていた時、ある文面に目が止まりました。

「9月6日の夜中、大きな地震が起こった。(中略)幸い家の中は大丈夫で守られた。やがて、娘の「やばい、やばい」という声で外に出た。満点の星たち！夢を見ているのか、巨大なプラネタリウムに入っているのか、吸い込まれそうな星空だ。やがて、停電なんだと気がついた。(中略)阪神・淡路大震災、東日本大震災の時、友人が語っていた星空はこれだった。人の力が尽きて、すべて途絶えた時、初めて気づくもの、初めて見えるもの、人工の光がある間には気づけない光、見えない光。こんなにも、星々は天に置かれていた。…(後略)」これは北海道にある小さな教会・島松伝道所が2018年に発行した便りの一部です。そうだった。北海道ほど見えないが、26年前、恐怖と混乱の中で、いつになくきらめく星空を見たのだった。普段は気づけないこと、見えないことに私達はある時ふと気づかされ、いつしか忘れて、またハッとする…。

今もコロナ被災の中、同じ空の下、懸命に歯を食いしばって生きている人達があります。窮地に追い込まれる現実、できることを見つけ、行動されている方の姿に勇気づけられ、私達も今できる限りのことをしようと思わずにはおれません。

昨年のクリスマス礼拝では、全園児で救い主イエスさまの誕生をお祝いしました。年少は礼拝堂での初大舞台。一人一人大きな口を開けて、その役の台詞を語っていました。心に響いた一つはイエスさまのお祝いに「行こう!」。この言葉だけは、アドベント当初より年少のお部屋から力強く、楽しげに聞こえていました。簡単な言葉だから?誰かに会いに行く、のは嬉しいことだから?コロナ禍で誰かに会いに行くことさえままならなかった子ども達にとって、よし、行こう!一緒に、行こう!それはとても喜び溢れる言葉だったのかもしれない。

年中は二手に分かれ、密を避けての聖歌隊。歌う曲数も例年より少なくなりましたが、ページェント演じる年長さんに見とれながらも、歌う番にはすくっと立ち上がり、弾んだ声での賛美でした。ひかりさんになったら、あの役がしたい、そんな思いを育てていたことでしょう。

年長の配役は、心の葛藤を経験し、話し合ったり、譲りあったり、歩み寄る難しさを感じたりしながら自分達で決めました。その後は各自の方法とペースで役に臨みました。「もう大丈夫。私、大きな声でしっかり言える」「もう覚えたから大丈夫」そんな言葉も聞こえてきました。当日、暗闇の中で一つの言葉を丁寧に右側の人、左側の人、真ん中の人をゆっくり見て心に届けとばかり、喜びを伝える姿に思わず感涙。一人一人の今迄の歩み、その尊さと成長の足取りが瞬く星のようでした。たとえどんなに小さな光であろうとも神さまはその一つを惜しみなく愛しておられる、そう実感しました。

今年も光り輝く子ども達や皆さまとともに、できることをできる時にできる場所で、気負わずじっくりと手を携えて歩んでいきたいです。本年もコロナに負けず!どうぞよろしく願いいたします。【園長】